

平成 18 年度
ユニバーサルデザインのまちづくり
小・中学生ポスター・作文コンクール
入賞作品集



小学生の部

区分	賞	氏名	学校名	学年	頁
作文の部	知事賞	野方 彩代	多久市立北部小学校	4年	1
	優秀賞	赤司 和則	多久市立東部小学校	6年	2
	優秀賞	城野 ありさ	鳥栖市立鳥栖小学校	5年	3
	佳作	山田 千遥	佐賀市立開成小学校	6年	4
	佳作	権藤 健士郎	鳥栖市立鳥栖北小学校	4年	5
	佳作	小池 しょうこ	嬉野市立轟小学校	2年	6
ポスターの部	知事賞	村吉 直緒	鹿島市立能古見小学校	6年	7
	優秀賞	片渕 真人	武雄市立御船が丘小学校	4年	7
	優秀賞	江口 ひなの	武雄市立御船が丘小学校	1年	8
	佳作	篠原 美岐	鳥栖市立麓小学校	3年	8
	佳作	山下 雅惟	嬉野市立轟小学校	3年	9
	佳作	千住 梓弓	久保田町立思斉小学校	6年	9
学校賞		基山町立基山小学校			

中学生の部

	賞	氏名	学校名	学年	頁
作文の部	知事賞	谷口 薫	佐賀清和学園佐賀清和中学校	1年	10
	優秀賞	土井 千明	久保田町立思斉中学校	3年	12
	優秀賞	森 優太	佐賀龍谷学園龍谷中学校	3年	13
	佳作	藤武 美都紀	久保田町立思斉中学校	3年	14
	佳作	蘭 堅斗	久保田町立思斉中学校	2年	15
	佳作	山本 朗弘	久保田町立思斉中学校	1年	17
ポスターの部	知事賞	鍵野 暁子	伊万里市立啓成中学校	2年	18
	優秀賞	天本 楓	鳥栖市立鳥栖中学校	1年	18
	優秀賞	藤富 菜摘	伊万里市立啓成中学校	1年	19
	佳作	山田 侑奈	東与賀町立東与賀中	1年	19
	佳作	福田 琴美	佐賀市立大和中学校	1年	20
	佳作	谷 朋実	佐賀市立大和中学校	1年	20
学校賞		久保田町立思斉中学校			

知事賞

「私がおばあさんになっても」

多久市立北部小学校 4年 野方 彩代

私は夏休みに「わくわくドキドキ・ボランティア体験スクール」にさん加しました。体にいろいろな道具をつけて、お年よりの人のぎじ体験をしました。

例えば手に軍手をはめて、新聞をめくってみたり、わりばしで豆をつかんだりしました。指が曲がりにくくて手の皮があつくなつたみたいで、大へんだなと思いました。

また、足に重たいスリッパをはいて、階だんをのぼったり、おりたりしました。こしにもおもりをつけていたので、せ中が曲がって、足もひきずったようにしか歩けませんでした。階だんをおりる時は足が重いので、落ちそうな気がしてこわかったです。

目が不自由な方ともうどう犬も来て、私は犬に手をひいてもらいました。その時は、なんだか目の前がまっ暗な中歩くのが不安でいっぱいになりました。外の車が通るような道だったら、もっとこわかったと思います。

お父さんに、ユニバーサルデザインのことを聞いてみました。今まで点字ブロックや、エレベーターの車イスの人用のボタンは見たことがあったけど、ユニバーサルデザインはお年よりや体の不自由な人だけでなく、大人も子供も、ベビーカーに乗った赤ちゃんも、みんなが使いやすかったり、くらしやすかったりするものだそうです。

出かけた時に探してみると、お金が入れやすく、ジュースが取り出しやすい自動はん売機や点字がついた手すり、トイレもみんなが使いやすいようになっているのに気が付きました。市役所には、立ったまま書く机、すわって書く机がありました。ほかにも、左ききの人用のハサミやきゅうすもあるそうです。もっとたくさん知りたいなと思いました。

私が行ったお店では、目が不自由だったり車イスに乗った人だと困るだろうなと思うことがありました。それは、売り物がいっぱいならべてあって、通路がせまかったからです。私が、もし体が不自由になったり、大人になって赤ちゃんを連れ回りしても、お年よりになっても、買い物に行ったり、遊びに行ったりしたいので、もっとユニバーサルデザインのことを勉強して、くらしやすい町にしたいです。市長さんや、お店の人をお願いしたり、私も何かひとつでも発明できたらなと思いました。

優 秀 賞

「ユニバーサルデザインのまちづくり」

多久市立東部小学校 6年:赤司 和則

ぼくは、ユニバーサルデザインについて考えました。ユニバーサルデザインとは、しょう害を持つ人だけでなく、お年よりや子供など、だれでも使いやすいデザインのことです。

実際に、どんな物があるか調べてみました。

例えば、ボタンが大きくて使いやすいリモコンや、開く力が少なくてすむハサミ、容器の横にでこぼこがついているシャンプー、点字と文字でお酒であることが分かるビールかん、牛にゅうパックの屋根に付いている切りこみなどがありました。電話機には、「5」のボタンだけ小さなポッチが付いています。

どれも、小さな工夫でみんなが便利になるものです。商品だけでなく、まちづくりにもちよとした工夫で、便利になるという考えが使えると思います。段差をなくすなど、バリアフリーの考えは、だいぶ進んできているようです。それを発展させた考えだと思います。ぼくのおばあちゃんはひざがいたくて、歩くのにつえがいらいます。バス停や公共のしせつなど人の集まる所には、いすがあれば楽だと思おうし、いすには、手すりがあると立つときに苦労しなくてすみます。道路のはしを歩くととき、道が少しななめになっていたり、でこぼこがあったりすると、歩きにくいそうです。きっと車いすでも同じだと思います。他にもバスに乗るときにステップが低かったり、建物の通路に手すりがあったりすると便利だと思います。

まだまだ気づかない所に少し工夫したらだれもが便利になる部分は、あると思います。駅やしせつを作るときに、多くの人意見を聞いて、アイデアを取り入れるといいと思います。佐賀のバスセンターは、おとし新しくなりましたが、計画するときには市民の多くの人にアンケートを取ったり、意見を聞いたりしたそうです。体の不自由な人も子供も使いやすいように工夫したそうです。通路を広くしたり行き先案内を大きくしたりいすを乗り場の近くと中の方に作ったりしています。駅からバスセンターに行くにも階段を通らなくていいようになりました。

これからもっとユニバーサルデザインの商品を見たり、しせつに行ったりしてみたいと思っています。

佳作

「障害者に優しい町」

鳥栖市立鳥栖小学校 5年:城野 ありさ

私が思う将来なってほしい町は、障害者が安心して外に行ける優しい町づくりです。

それは、夏休みに私は、母と障害のある人たちのリハビリに参加したからです。参加した三日間で、障害のある人たちが、いつも困っていると言う事を聞きました。今まで盲導犬については、学校で習ったり、視覚障害者の方から話を聞いた事がありましたが、ここでは、私より一つ年上の女の子が車イスで、お母さんの手を貸りなければ食事も出来ないほど重い障害があると言う事を知りました。ここのリハビリでうでを伸ばす事が出来るようになりたいと言う希望で参加されてありました。少しでもうでを伸ばすことが出来れば、洋服の脱ぎ着が楽になるからと言われました。家に帰って、私は、うでを伸ばしたまま洋服を脱ぎ着してみました。たしかに時間はかかるし、イライラしました。障害がある方は、これが毎日だと思ったら、むねがあつくなりました。お母様は、「この子にも、色々なことを体験させたい、車イスだけど、色々な所へ、つれて行ってあげて、喜ぶ顔が見たいの。」と言われました。でも、一番困っているのは、身障者用のトイレだと言われました。おむつを替える所がないと言うことだった。赤ちゃん用のものならほとんどあるけど、大人が使うものがないと言うのだ。私は考えました。新しい町づくりとは、こういった、障害のある方の声を聞き、誰でも、どこでも行けるようになれば、人の心も優しくなり、思いやりのある、まちづくりが出来ると思います。

佳作 「不自由な人にやさしい製品」

佐賀市立開成小学校 6年:山田 千遥

私がこれを選んだ理由は、コマーシャルで車イスが自動的に物かん知しながらよけていくとゆうのを見て、とても便利だと思ったからです。

私も不自由な人に役立つ製品、喜ぶ製品を何か考えられないかなと思いこれを選びました。

私が考えた製品は四つあります。

まず一つ目は角のない製品です。例えば机やテーブルなどです。なぜかと言うと目が見えない人が角にあたったり、歩きにくかったりするとちょっと危険だと思ったからです。また、ケガをする原因にもつながると思うからです。

二つ目は、部屋のあちこちにささえとなる棒があれば便利だと思います。なぜかと言うと、健全な人達でさえそれをささえにする事があるからです。私の家の玄関やお風呂場にもあるけれど、くつをはく時やお風呂からあがる時などに知らず知らずのうちに使っているのに気づいたからです。

三つ目は、体の不自由な人は大人とは限りません。子供もいます。子供には遊べる物として、音の鳴るボールがあるといいなと思いました。なぜかと言うと目が見えない子には音でボールがどこにあるか分かるし、耳が聞こえない子には、ふつうのボールとして使えると思ったからです。

四つ目は、自転車です。自転車に乗る事は出来ないけれども乗った感覚を味わう事ができ、ふつうに乗っているのと同じような気持ちになる事ができれば楽しいと思います。

今、私に思いつくものは、これぐらいしかありませんが、少しでも体の不自由な人達にとって役立つ物がもっともって増えていき、生活のしやすい環境になっていければいいなと思います。

今、私達の生活の中にはバリアフリーという言葉がよくでできます。バリアフリーは段差をなくす事で不自由な人達にとっても、健全な人達にとっても生活がしやすい物です。

私はこの活動はとても良い活動だと思うし、これからも、もっともっと広がって行ってほしいと思います。

佳作 「点字ブロックに、心配りを。」

鳥栖市立鳥栖北小学校 4年 権藤 健士郎

ぼくは、毎日スイミングに通っています。その歩道には黄色のでこぼこ道がありました。わからなかったので家の人に聞いてみたら、目のみえない人が、安心して歩けるように作られた『点字ブロック』ということがわかりました。ぼくは、一回点字ブロックの上を、目のみえない人の気持ちになって歩いてみることにしました。

まず、アイマスクをしました。目の前が真っ暗になりました。そして車の走る音がものすごくうるさく感じました。かさを持って点字ブロックの上を歩いてみました。歩き始めたら車にぶつかるかも、と心配になってきました。と中に車が停まっていたので、点字ブロックの上を歩けなくなりました。だから、車の後を回りました。ちょうどその時にその車がエンジンをかけました。ぼくはビクッとしました。運転する人は気をつけてほしいと思いました。他には、歩いている時に電柱や植木ばちにかさが当りました。そして道路がかたむいていたのでとても歩きにくかったです。目が見えない人は歩くことがとても大変だと思いました。同じ道をアイマスクをして歩いた時は、九分かかりました。でもアイマスクをしなかったら四分もかかりませんでした。点字ブロックをよく見たら、線があるのと丸い点の二しゅ類があるのに気づきました。丸い点は止まらなければいけない所にありました。

ぼくは、たくさんを感じました。点字ブロックの上に物があったら目のみえない人は道がわからなくなります。まず車を運転する大人の人達は、車を点字ブロックの上に停めないようにしてほしいです。植木ばちやいろんな物を置かないようにしてほしいです。それと歩道のはばがせまいので人とぶつかりやすくなります。もう少し歩道のはばを広く作ってほしいし、平らにしてほしいです。そして歩道を歩いている人達もよけてあげたり手をかしてあげたりしてほしいです。それからおうだん歩道は、どこのおうだん歩道でも音が出るようにしてほしいです。みんな一人一人が点字ブロックにたいして心配りをわすれないようにしてよい鳥栖市になってほしいです。

佳作 「しょうがいしゃをこもらせないで」

嬉野市立轟小学校 2年:小池 しょう子

わたしのお父さんは、しょうがいしゃです。体の左がうごきにくいですが、でも、車のうんてんはできます。

わたしとお父さんがこまっていることがあります。それは、スーパーのしんたいしょうがいしゃのちゅうしゃじょうがときどきつかえないことです。しょうがいしゃでもないのに、車をとめている人がいます。しんたいしょうがいしゃではない人は、べつのところにとめてくれるといいと思います。

それと、しんたいしょうがいしゃのちゅうしゃじょうに、三かくのおきものがあるときもこまります。わけは、三かくのおきものがあると、お父さんが一人のときは、お父さんが車からおりて、のけないといけないからです。お父さんは走ったりできません。長く歩くこともできません。三かくのおきものをのけるのがたいへんです。三かくのおきものは、ふつうの車が入らないようにおいてあると思います。でも、三かくのおきものがおいてあると、こまるのが、しんたいしょうがいしゃです。元気な人がいつもしんたいしょうがいしゃのちゅうしゃじょうに車をとめないようにしてくれたら三かくのおきものはいらなくなると思います。

わたしとお父さんのおねがいです。しんたいしょうがいしゃのちゅうしゃじょうを、わたしとお父さんにつかわせてください。

知事賞

鹿島市立能古見小学校 6年：村吉 直緒



優秀賞

武雄市立御船が丘小学校 4年：片淵 真人



優 秀 賞

武雄市立御船が丘小学校 1年：江口ひなの



佳 作

鳥栖市立麓小学校 3年：篠原 美岐



佳 作

嬉野市立轟小学校 3年：山下 雅惟



佳 作

久保田町立思斉小学校 6年：千住 梓弓



知事賞

だれもが安心して住める町

学校法人佐賀清和学園佐賀清和中学校 1年:谷口 薫

普段、私たちが何げなく利用している道路や病院、図書館といった公共施設。ここでは、「ユニバーサルデザイン」というたくさんの人が使いやすいよう・住みやすいようにする工夫がなされています。

私の祖母は、福岡県に住んでいます。歳はもう八十歳を過ぎています。私の家族は、長い休みがとれたら祖母の家に行きます。その祖母の家には「ユニバーサルデザイン」がたくさんされています。まず、祖母の家はマンションの一階にあります。ふつう、マンションの一階でも二、三段、階段をのぼらないといけないのに、祖母のマンションはスロープのようになっていて、段差がまったくありません。それに家の中でも、風呂場以外段差がないのです。そして、祖母の家の電気のスイッチはすごいのです。それは、ふつう私たちが使っている電気スイッチ十個分くらい大きさをしているんですよ。そうすると、力を入れなくてもラクに電気のをつけたり消したりすることができます。それにスイッチの真ん中のところが電気を消すと同時に光るしくみになっています。そのおかげで、真っ暗な所でもスイッチがどこにあるかをすぐに見つけることができるので祖母は「助かる」と言い喜んでいきます。それに家の中に手すりがあり、体が思うように動かない祖母にはとっても大切です。

そんな祖母が助けられている手すりや電気のスイッチなどはすべて「ユニバーサルデザイン」のひとつです。他にも、信号機から音が出たり、点字ブロックが幅の広い歩道に設けられていたり、急な坂道にはかべ側に手すりがついているところがあります。建物の中では、入り口の取っ手が縦に長くつくられていたり、外で階段があるところには必ず、スロープがあり、床が平で段差がなかったり室内にも点字ブロックがどこにでもついているのです。こういういろんなたくさんの方が使えるようにしてあるものが、他にもたくさんあります。

こういったものは、お年寄りの方、障害を持っている方、そして小さな子どもや私たちみんなの事を考えてつくってあるのです。こんなだれもが安心して使える「ユニバーサルデザイン」は、日本全国いや、世界中にたくさんあり、いつも私たちは助けられています。

そんな私たちにでも「ユニバーサルデザイン」のようなことをすることができます。

例えば、福祉のボランティア活動に参加したり、障害を持っている方に声をかけるとか、迷っているお年寄りの方に手をさしのべるとか、自分のまわりを見ると、意外と自分に出来ることが見えてくるはずです。

そして、これから、私たちが八十歳や九十歳になっても安心して住めるように、まずは私たちが、“ユニバーサルな心”を持ち、だれもが安心して住める町にしていきたいです。

優 秀 賞

「共生のために大切なこと」

久保田町立思斉中学校 3年:土井 千明

私は、お年寄りの方の割合がとても高い町に住んでいます。特に、私の家の周辺は子供がいる家庭は、指で数える事ができるくらい少ないのに対して、お年寄りの住む家はとても多く、比べものにはなりません。

窓から外の景色を見渡せば、右も左も田んぼしかないという、この家に引っ越してきたのは2年ほど前でした。前の家も同じ町内だったのですが、近くには駅やコンビニがあり、同じぐらいの歳の子も大勢いたので、引っ越した場所には同級生が一人もいない事に驚き、ほとんど車の通らない道の静けさに不安を覚えました。

「こんな所、来るんじゃないかった」そう毎日のように思っていた私の気持ちに変化が表れたのは、引っ越して間もなくでした。そのきっかけは、本当に些細な事だったのですが、私はそれで高齢者ばかりの、この場所を見る目が変わりました。それは「いってらっしゃい」という、さり気ない言葉でした。朝、学校へ向かう途中で、庭で花に水やりをしていた全く見知らぬ、おばあさんにそう言われ、なんとなく照れつつも嬉しかったです。お世辞にも便利とは言いがたい場所ですが、今は嫌いではありません。むしろ、人と人とが繋がっているような温かい雰囲気を感じ心地よく感じられるようになりました。

私は引っ越して来て、周り的高齢者の方達から学びました。誰に取っても住みやすい町というのは、何も便利で活性化された町というわけではありません。個人の違いも関係なく色々な人が笑いあって過ごせる町だと思います。最近では事件が多発しているため「知らない人に挨拶してはいけない」という呼びかけをしている地域も多いようです。しかし、実際に誘拐などの事件に巻きこまれそうになった時、助けを求めるのは遠くにいる警察ではありません。身近にいる近所の方達だと思います。挨拶ぐらいのコミュニケーションは必要ではないでしょうか。笑顔で挨拶しあう明るい町が高齢者に取っても良い町といえるのではないかと思います。

「共生」それは年齢の違いも含め、どんな人達も共に生き、共存しあうという意味を持ちます。そのために必要なのは、設備や優先席、優先駐車場だけではありません。そんなに難しいような事でもないのです。ただ、特別に違う人間としてではなく、同じ人間の仲間として、作りものの優しさでない、ありのままの素直で自然な言葉、笑顔、思いやりで接すること。それが一番大切なのではないのでしょうか。

優秀賞

「本当にバリアフリーになったのか」

学校法人佐賀龍谷学園龍谷中学校 3年 森 優太

私達はよくバリアフリー、バリアフリーと聞く。バリアフリーとは障害者やお年寄りでも安全に、不自由なく暮らす、生活することだ。けど、そういった試みはごく一部だけにあってもいけないと思う。家にはいたる所に段差があるし、階段だって障害だ。扉だって問題である。町なんてもっとひどい。そういったことには一切お構い無しだ。一軒家の方がマンションよりもお年寄りには住みにくいというのをテレビか何かで見たことがある。セキュリティの面もあるだろう。けど、やっぱり普通の家よりもマンションの方がバリアフリーが進んでいると思う。ある本の中にこういった言葉があった。「年寄りに住みにくい家は、老若男女を問わず住みにくいにきまっている。」と。まさしくその通りだと思う。

私達の言っているバリアフリーはあくまでも私達の目線からのバリアフリーである。本来ならばお年寄りや障害者からの目線のバリアフリーにすべきなのではないか。バリアフリー、バリアフリーと言っている人達はただ「バリアフリーをした気だけでいい」だと思う。あと少しでいいからちょっとした配慮があるだけでも大きく違うと思う。普通の人が転んでしまうような所はお年寄りや体の不自由な人が転んでしまうのは当然である。普通の人+ まで気配りをしなければいけない。

バリアフリーを進めても私達の意識が変わらなければ意味がないかもしれない。点字ブロックの上に自転車を置いたりすることが当たり前のようにになっている。こういう状況じゃいくらバリアフリーとかを進めても意味が無いように思える。

このようにまずは意識、考え方を変え、バリアフリーを進めていくにしても視点をお年寄りや体の不自由な人にしなければいけないと思う。それが本当のバリアフリーなのではないだろうか。

佳作

「思いやりの心からできる街」

久保田町立思斉中学校 3年 藤武 美都紀

思いやりとは何だろうか。思いやりは相手の立場になって考えることだと私は思う。相手の立場になって考えてみると色んなことがわかってくる。不便なことが次から次へと出てくるだろう。それを解決し、みんなが住みやすく安全で安心できる街にできればどんなにいいだろう。言うのは簡単でもいざ、やろうとすると難しい。なぜなら、たくさんの人が思いやりを持ち積極的になって活動をしなければいけないからだ。残念ながら現在の世の中はそうあまくはなく、協力するどころか人とのふれあいが少なくなってきたとまで言われている。これではいけない。そう思って思いやりを持たなければいけないなんて言っている私は、はずかしながら何もできていない。

私は友達と遊びに行った際にバスに乗った。すると、途中のバス停から買い物袋を持ったおばあちゃんが乗ってこられた。しかし、席はもうどこもあいておらず、困っていた。私は、どうしよう、どうしよう、席をあけた方がいいのかな、と思いながらも何もできなかった。すると、前に座っていた女子高校生が笑顔で「どうぞ」とおばあさんに席をゆずった。その時私は、すごい、とただただびっくりした。知らない人に話しかけることは意外とむずかしい。しかし、その女子高校生は笑顔で席をゆずっていた。これが本当の心からの思いやりなんだろうなと思った。

もしかすると、本当に思いやりの心からの行動だったから自然と笑顔になったのではないだろうかと思った。とにかく、私はその光景を見て、将来、いや、明日からでもこういう思いやりの心で人と接することのできる人になりたいと思った。そのためにはまず、自分のできることからやろうと思った。小さなことでも、いつかは人に席をゆずったりできるような優しい思いやりを持てるようになるためにがんばってみようと思う。

安心、安全な街づくりへの第一歩は、思いやりの心からだと思う。思いやりの輪が大きくなっていけばたくさんの笑顔あふれる街になると思う。そのためにみんなが相手やまわりのことを考えていくようにしたい。

佳作 「田舎の在り方」

久保田町立思斉中学校 2年 蘭 堅斗

佐賀生まれの佐賀育ち。まさに典型的な佐賀人である僕は、物心ついたころから今に至るまで「東京」、「大阪」などのいわゆる「都会」といわれる所にひかれたことが一度もない。今でも、「一生、この田舎で暮らすっか」と聞かれたならば僕は「そうだ」と答える。それほどまでに僕はこの「田舎」が好きなのだ。

現代社会に生きている人のほとんどは今の生活の中に何かしらのストレスを感じているという。人々はその「イライラ」をさまざまな方法で晴らしている。スポーツをしたり、本を読んだり、音楽を聞いたり。しかし、人々がそのような行動をとるのは、単にそれらを晴らすためだけではなく、心のどこかで、拠り所を求めているのだと僕は思う。

日本人は昔から自分の心を優しく包みこんでくれるような「心の拠り所」を求めてきた民族である。それは日本の文化からでもいえる。日本人は古くから自分の先祖を敬うことを大切にしてきた。現在でも彼岸の行事や墓参りなどが行われているように日本人にとっての心の支えとなっているのだ。また、日本は昔から神や仏への信仰心が強い国でもある。このように日本人にとって「仏教」は心の拠り所、そのものだったのだ。

では、現代人の心の拠り所とは何だろうか。もちろん、「仏教」もその一つとして言って良いだろう。一人一人、拠り所は違うのだろうが、日本人の心の根本には自分の生まれた土地の記憶があるはずだ。人は自分の生まれ育った地、すなわち「故郷」の思い出を持っている。「故郷」、「ふるさと」。これらの言葉は我々に何を想像させるだろうか。「一面に広がる水田、きれいで澄んでいる空気や水、近所の住人たちの気さくな会話」。若干の差はあるだろうが、日本人のほとんどがそうイメージするだろう。故郷は人それぞれ違って当たり前だが心の中で想像する「故郷」は皆、驚くほど似ているのだ。僕は、人々は「自分」の故郷と「心の中」の故郷の二つを持っているのではないかと思う。心の故郷は日本人の「昔への憧れ」の表れではないかと思う。現代人が皆同じくイメージする故郷の情景こそが人々が昔に拠り所を求めている証ではないだろうか。

僕には神奈川に住んでいるいとこがいる。いとこは二年に一回程、佐賀に来るのだが夏休み中に来たときに一度だけ、有明海に連れて行ったことがある。干潟で有名な有明海だが、いとこたちは有明海など見た事もない。有明海の干潟を見るや、「うわー、すごいね。」と感嘆の声を上げる。その驚きと感動が入り混じった顔を

見て嬉しくなった反面、都会に住んでいるいこたちがかわいそうに感じた。

現代人の心の拠り所となっている故郷。それは今や、佐賀などの地方、つまり田舎と同調しつつある。田舎ブームなどがある今、心の支えとなっている「心の故郷」に近く実在する存在である「田舎」を人々は求めるのである。しかし、その田舎では、都会にあこがれ都市部へ行ってしまう人たちがたくさんいる。大切なものが近くにありすぎれば、その大切さは実感できにくいものなのである。

それでは、田舎はこれからどう在るべきなのか。それは、これからをになう僕たちの世代から考えていかなければならないと思う。僕は田舎は田舎で在り続けてほしいと思う。田舎でありながら発展できる、そんな街にしていきたいと思う。今、日本は大きな変化を向かえようとしている。地方が重要視されている今こそ、田舎の在り方を真剣に考える時期なのではないだろうか。

佳作 「ぼくが外国人だったら」

久保田町立思斉中学校 1年 山本 朗弘

「ぼくがもし外国人として久保田町に住んでいたとしたら、今と同じ生活が送れるのだろうか。」ぼくは、県立宇宙科学館に行ったときに見た外国の人を見て思った。そして、ぼくが外国人だったとき、どんな点で絶対に困るかを考えてみた。

一つ目は言葉だ。周囲の人が皆、日本人で日本語しか話せないとする。聞きたいことや分からないことがあっても外国語では通じない。そうするとぼくは、きっと役場に行くだろう。しかし、役場で通じる外国語は、ぼくが聞いたところ、英会話をしている人と韓国語を練習している人しかいないらしく、それも不十分らしいから、英語と韓国語が少しということになる。これだけだと、おとなりの中国の人が来ても、通じないのだ。万一の事も考えて、近くの国の言葉が話せるようにしないと、困ると思う。

二つ目は情報だ。ぼくの住んでいる町には、「広報くぼた」という情報誌がある。これは町民に情報を伝えるものだ。町民は外国の人が住んでいればその人も当たるのに、このような情報誌はないそうだ。となると、外国の人はどのようにして、情報を得るのだろうか。得られないなら、運動会、町の行事など参加ができない。つまり、楽しみが減るということだ。そんなの絶対いやだ。

三つ目は連絡だ。阪神大震災のような地震や火事が起きたとき、日本語で指示されても、自分が何をすればよいか分からず、動くことができないと思う。きっと、逃げ遅れたりして、身の危険にさらされることになるかもしれない。そうならないためにも、地区ごとに、少しは外国語の話せる人がいないと困る。

今、日本は便利で豊かな生活ができるが、だれもがそんな生活ができるわけではない。だから、だれもが同じ生活ができるように、がんばっていかないといけないと思う。今のままでは、外国の人はぼくたちと同じ生活ができない。ぼくも中学校で英語を学習しているので、一生懸命勉強して、日本語のものを訳したり、困っているときには一声かけて、助けてあげることができるようになりたい。そして、外国の人が日本に来ても困らないようにしていきたいと思った。

これから町を支えていくのはぼく達だ。今の現状を再認識し、今、自分に何ができるかを考え、積極的に取り組んでいこうと思う。

知事賞

伊万里市立啓成中学校 2年：鍵野 暁子



優秀賞

鳥栖市立鳥栖中学校 1年：天本 楓



優秀賞

伊万里市立啓成中学校 1年：藤富 菜摘



優秀賞

東与賀町立東与賀中学校 1年：山田 侑奈



佳 作

佐賀市立大和中学校 1年：福田琴美



佳 作

佐賀市立大和中学校 1年：谷 朋実

